

キジムナー伝承に見る伝承の場

保坂 真理

1. はじめに

沖縄および周辺諸島で伝承されてきた伝説上の生物の中に「キジムナー」というものがいる。一般に木の精霊と言われ、各地で様々な伝承が伝わっている。また地域によってはキジムナーとは異なる呼称があり、独自の話の伝承がある。

その中でも豊見城市に伝承されているキジムナー話に焦点をあて、どのように伝えられているかを明らかにしていく。

2. キジムナーとは

キジムナーは沖縄本島を中心に「木の精霊」などと考えられている精霊である。由来は人以前の居住者、木の精霊、溺死者、子どもの死者などと言われており、その形態は小さい子どもの姿、赤ん坊に類似、おかつぱ頭で毛が赤いなどと言われている。また、お産をするものや性別があるものもいるとも伝承されている。

東北で伝承されている座敷わらしに類似しており、住みついた家は栄え、キジムナーがいなくなる、または、逃げられたりするとその家は衰え、没落すると言われている。

3. 沖縄県豊見城市のキジムナー話

3.1 基本的話型

事前調査で、豊見城市に伝承されているキジムナー話の中に「キジムナーと友達」型の話があることがわかった（中村 1998）。話の流れは以下のようになっている。

- ・ある家のガジュマルの木にキジムナーが住みつき、家の人と仲良くなる。
- ・キジムナーと毎晩漁に出かけ豊漁になり、家が裕福になる。
- ・毎晩漁に連れて行かれるため、嫌気がさした家の主人がキジムナーを追い払う。
- ・家が没落する。

また、この話には実在する地名、屋号もでてくる。それが豊見城市名嘉地の大屋家である。この大屋家は、かつてキジムナーが家に住み着いて家が栄えたという言い伝



写真1 ガジュマルの木

えが今でも残っている。また、この伝承にはキジムナーは大屋家に住み着く以前に、豊見城市字豊見城の内間家という家にいたという話と、糸満市潮平の玉井家という家にいたという2パターンのお話がある。

それらの地点で伝承される側の家と伝承する側の周囲の間に、何か伝承の捉え方の違いがあるのかということを中心に明らかにしていく。

3.2 字豊見城内間家

内間家とその近所に住んでいる方々にお話を伺うため、実際に字豊見城に調査に向いた。自治会長の方やその他の年配の方にお話を伺うが、内間という家についての情報は得ることができなかった。そこで豊見城市文化課を訪問し、内間家について調査した。

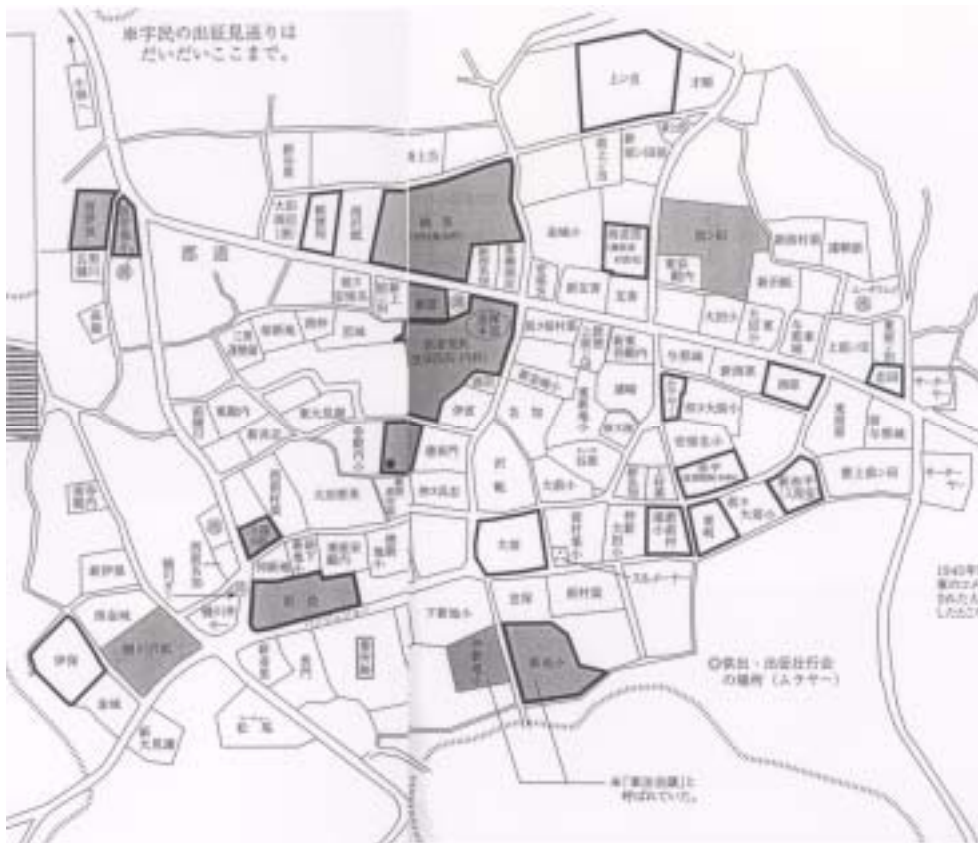


図1 字豊見城地図(1945年) (資料提供:豊見城市文化課)

図1は文化課でいただいた1945年の字豊見城の地図だが、この中にも内間という名前や屋号は見つけることができなかった。これ以上さかのぼることができなかったため、内間家についてはっきりとしたことは言えない。しかし、お話を伺った方々の年齢と地図から判断すると、1920年代以後には字豊見城に内間家は存在していないことがわかった。

3.3 糸満市潮平玉井家

上記のように内間家は存在が確認できなかったが、糸満市字潮平の玉井という屋号のお宅は実際に存在した。しかし、本家の長男はすでに亡くなっているということだった。そこで、三男の方の奥さんにお話を伺ったが、名嘉地にキジムナーがいたという話は知っているが、玉井家にかつてキジムナーがいたという伝承や、そのキジムナーが名嘉地に移動したという伝承は知らないということだった。

他の潮平住民の何人かは、キジムナーが潮平から豊見城名嘉地へ移動したという話を聞いたことがあるそうだ。

4. 伝承に関わる人々

現地調査を進めていく段階で、この伝承の当事者の家の人々の伝承の捉え方にある傾向が見えてきた。

私が糸満市の潮平で現地調査を行なった際に、潮平住民であり糸満市史の編纂等にも携わっている、金城弘和さんから大変興味深いお話を伺った。過去に金城さんが糸満市史『村落資料』字潮平というものを作成しキジムナーの話を載せた際、「
という非常に貧しい家」という記述をしたそうだ。すると、その子孫から「なぜ個人名を載せるのか。」という苦情が来て、現在編纂中の市史ではその話がカットされているということだった。

また、後に編纂された『沖縄糸満市の昔話』(立命館大学説話文学研究会・糸満市教育委員会)の中にもその話は載っていないため、そこでも何か反対があったのではないか、ということだった。

県内でもキジムナーが住みつき、家が栄えたという言い伝えが有名な豊見城市名嘉地の大屋家にも訪問したが、「特に話すことはない。」と言われ詳しい話を伺うことができなかった。かつては大屋家の入り口で威容を誇っていたガジュマルの木(写真2)も、今ではシロアリに食べられてしまったらしく、すっかり細くなっていた(写真3)。そこでかつての新聞のインタビュー記事(『琉球新報』1995年10月12日)から大屋家の上原さんのコメントを見てみることにした。まず、キジムナーの話に関しては、「祖先は農業の傍ら瀬名島に漁にでていた。漁に行く前に火をガジュマルの老木につるし、海に行く道すがら、漁の最中、そして漁を終えた後も木に火を掲げた。その日を遠巻きに見た人たちが、キジムナー



写真2 大屋家のガジュマルの木(1995年)
(『琉球新報』1995年10月12日より)

と見立てたのでは。」と述べている。また、祖先の人柄については、「働き者で通っていた。キジムナーと仲良くなって漁で、というより農業を懸命に働く中で幸運を招いたようだ。」と述べている。

これらのことから、この伝承の当事者の家の人々は、自分たちやその祖先が伝承の中で語られることを快く思っていないように感じた。一族の繁栄が祖先や自分たちの努力の結果ではなく、キジムナーが住み着いたからである、というように周囲に語られてしまっているからだろう。調査を進めていく際、私に「キジムナーのおかげで家が繁栄したと思われるのを嫌がる人もいるから気をつけた方がいい。」と忠告してくれる方もあった。



写真3 大屋家のガジュマルの木(2007年)

また、今回の調査で、この伝承の当事者の家の人々は伝承に関して無関心な場合が多い、ということもわかった。ほとんどの情報が近所の方や、同じ町内に住んでいる方からのものであった。

5. まとめ

今回の調査で二つのことが明らかになった。

一つ目はこの伝承は、当事者の家の人々からではなく周囲の人々から発生し、さらに広い地域へ広がっていくということである。周囲の人の見間違いや、勘違いからこの伝承は生まれているようだ。近隣住民の裕福な家庭に対する羨望が深く関わっているのではないかと。このことはこの伝承に限らず、他の伝承や都市伝説、噂にもいえることだろう。それに対して当事者は伝承に無関心であったり、それが語られることをあまり快く思わない傾向がある。

二つ目は世代間による伝承の伝わり方には大きな差があるということだ。今回詳しいお話を伺ったのは70歳代以上の方々であり、それより若い方からは詳しい話は全く聞くことができなかった。このことから、今後このキジムナーの伝承は人々によって語られることはなくなってしまうのではないかと感じた。

最後に、調査に協力していただいたすべての方々にここで感謝の意を表したい。

参考文献

中村史(1998)「沖縄・豊見城村のキジムナー話」『人文研究』第95輯
『琉球新報』「新うちな一歴史探訪」(1995年10月12日)

参考ウェブサイト

りゅうきゅうねしあ「キジムナーの伝承」http://www.urban.ne.jp/home/ngsek/kijimuna-_001.htm